

日本文藝家協會編

代表作時代小説

第十六卷

編纂委員

尾崎秀樹

武蔵野次郎

和田芳恵

村上元三

山岡莊八

普及版 第十六卷

代表作時代小説 定価一〇〇円

昭和五十五年九月三十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六二

出張所 東京都新宿区松方町一番地

振替・東京六一二七五七

電話・(三六)二五五〇

0093-809816-5170

無検印承認

まえがき

時代小説が曲り角にきた、という声をよく聞くが、実作者としての立場から言えば、そういう感じは少しもしない。中間誌に載る時代小説が少くなったのは事実だが、若い人が次々に出てきている。現代小説の作家が、歴史小説はもちろん、博奕打を書いたりする例も多くなった。

こんどの代表作の銓衡をするときも、一年間でこんなに時代小説の数が多いとは思っていなかった。加えて、新人が増えているのも、心強い限りであった。

時代小説は、ある程度の勉強期間と、年期を経るのが必要のように言われている。だが新人の作品の中にも、いままで使い古されたものではない、新しく発掘した資料を使っているのが目についた。ことに、そういう新人が、地方の同人雑誌に拠って勉強している例も多い。

この代表作選集は、まだ一度も収録したことのない新人の作品を中心にしたいが、版元の都合もあって、なかなかそうも行かない。なるべく作品の数を多くしたいので、枚数の長いものは、残念ながら割愛する、という場合も多い。

とにかく、文芸家協会編纂の中では一ばん部数も多く、第一巻からまとめて欲しい、という読者が増えている、と聞くのはうれしい。第一巻からの目次をひらいてみると、ずいぶん作家の顔ぶれも変っている。あと十年も経ったら、半分以上は入れかわっているだろう、といつぞや編纂委員の亡き富田常雄君が言っていたのを思い出した。

それだけ、新人が出ている、ということになる。負け惜しみではなく、作品の質も落ちているとは思えない。時代小説が曲り角にきている、という説は、新人旧人に限らず、いつも努力をしている作家にとっては、実感として伝わってこない。

村上元三

目 次

刃 傷 背 中 の 新 太 郎 さ む ら い と は 冬 の 螢 浅 間 追 分 け 明 石 桜 お れ 無 刀 取 り ち う わ な り 討 ち 重 庵 の 転 々 学 問 浪 人 ひ と だ ま 半 之 丞

池波正太郎 伊藤桂一 今村了介 岩井護 川口松太郎 黒部亨 神坂次郎 五味康祐 早乙女貢 司馬遼太郎 柴田鍊三郎 杉本苑子

七 三 四 五 五 三 三 二 五 一 五 二 三 二 三

いろはにほへと
かたきうち

武田八州満 二六

謀略文禄・慶長の役

陳舜臣 三三

辛酸の賦

佃実夫 三三

羅生門河岸

都筑道夫 三三

踊り屋台

戸板康二 三六

甚四郎剣

戸部新十郎 四〇

緑蘿の牆

永井路子 四三

柝打武左衛門

南條範夫 四三

比丘尼宿

村上元三 四四

ごますり大名

八切止夫 四二

二十年目の情熱

山手樹一郎 五七

まえがき 村上元三
あとがき 武蔵野次郎

刃^{にん}

傷^{じょう}

池
波
正
太
郎

作者のことは

池波正太郎

この小説は、信州・上田藩士、外村左盛（よのぢさまもり）の覚書〔通旦筆記〕という筆写本から材を得ました。

ほんの七、八行の記述から、このような小説に仕あげた道程を書いてみてもつまらないことでしょう。

この小説は四、五十枚をまる二日で書きました。なごらく材料をあためていたので、あたまの中に、すっかり出来あがっていたのでしよう。

著者略歴

大正十二年一月二十五日、東京浅草聖天町に生まれる。

〔郵一四二〕品川区荏原二―一―二

長谷川伸に師事す。

日本文芸家協会々員

劇作者（主として新国劇上演）を経て「錯乱」により昭和三十五年上半期直木賞を受賞

一

偽の恋文をつかい、目ざす男か女のどちらかをさそい出し、これを物陰にかくれて見物するといういたずらを若者たちがやるのは、むかしからよくあったことだ。

もっとも、近年の青年男女の間で、こうしたことがおこなわれているかどうか、筆者は知らぬ。

それは、文化四年三月はじめの或る日のことであつたから、現代より約百六十年ほどむかしになるわけだが……。

丹後の国・田辺三万五千石の大名、牧野豊前守の家来で、鈴木弥兵衛のむすめ・千代が「付け文」をうけとつた。

牧野家の江戸藩邸内において、である。

牧野家の江戸上屋敷は、江戸橋の西、南茅場町にあつた。

現在の株式取引所を中心とした兜町の大半がそれにあつた。

千代の父・鈴木弥兵衛は江戸づめの藩士であつたから、いうまでもなく、藩邸内の長屋に起居していた。

邸内北側の一角にならぶ家来たちの長屋の裏がわが、石畳の通路になつてい、

「あ……？」

その日も夕暮近くなり、同じ長屋に住む大橋作左衛門の妻女のもとへ用事ができて、わが家から通路へ出た千代を待ちかまえてでもいたように、長さ一尺ほどの竹の棒にむすびつけられたその付け文が、夕闇がただよう通路のどこからか、千代の足もとへ投げ寄せられたのであつた。

通路は、せまい。

付け文をひろつて、あたりを見まわした千代の眼は、人影をとらえることができなかった。

付け文は、向うに見える共同井戸の陰から投げられたようだが、井戸のうしろには馬場へ通ずる板塀があつて、その向うに、人影は早くもかくれ去つたものらしい。

千代の「怒り肩」が、かすかにふるえた。

大きく張ったひたいの下にくぼんで見える、彼女の小さな眼が何度か、あたりを見まわした。

通路には、ほかに人影がなかった。

千代が、その付け文を読んだのは、大橋の妻女との用事をすませ、自宅へもどつてからである。父の弥兵衛は勘定方に属して、五十石二人扶持の身分だから奉公人も下女をふくめて三人ほどだし、弟の弥太郎は、このところ病いがちで床にふせている。母は七年前に病没していた。

千代は、よくねむっている弟のまくらもとで、付け文

を読んだ。

差出人は、同じ牧野の家来・辻又五郎である。彼は邸内・東がわの長屋に住む独身の青年藩士で、年齢は千代と同じ二十六歳であった。

(辻さまが……?)

千代にとって、

(おもいもかけぬ)

ことではある。

ひたいが張っていようが、怒り肩であろうが、金壺眼であろうが、千代ほどに健康な肉体の所有者であれば、現代女性としてすこしも恥ずかしからぬ。むしろ個性的な美をたたえられたやも知れないのだ。

だが、百六十年前の女としては、

「鈴木のみすめは化けものだ」

と、いうことになる。

二十六歳のこの年齢まで、ただの一度も、千代には縁談がない。

亡くなった母も、このことを苦にしぬいていたし、むろん、千代とてもおだやかではなかった。烈しい劣等感が反動的にそうさせたものか……。

千代は二十のころから、南新堀町に一刀流の道場をかまえる鬼頭次郎八の門へ入って、三年後には折紙をゆるされるほどの腕前になった。

これが「殿さま」の牧野侯の耳へ入り、

「おもしろい。家中の若者と試合せて見よ」

と、いうことになった。

こういう「殿さま」は、一国の主としてあまり上出来の部類に入らぬといつてよろしい。

しかし、君命である。

千代は、藩邸内の馬場にもうけられた試合場で、次から次へ立ち向う家中の子弟たち七名を、木刀で叩き伏せてしまった。

殿さまは大よろこびであったけれども、其の後の千代が、さらに「化けもの」あつかいをうけるようになったことなど、知るよしもない。

藩邸内で行き合う藩士たちの、軽侮の視線を、千代は、むしろするどく見返した。

「いやもう、鬼女のごとくすさまじい目つきだわい」

「にらみ殺されそうになってな」

などと、うるさい。

この中にあって、辻又五郎は、あまり千代に関心をもたぬようであった。

又五郎も勘定方において、禄高も千代の父より低い。二度ほど、父をたずねて来たこともある。

ふくらとした顔だちをしている辻又五郎は、小肥りの、口数の少ない若者だが、鈴木弥兵衛にいわせると、

「か、いひななく、まことによく御役目をつとめてゐる」

そうな。

こうした人柄の辻又五郎の付け文だけに、千代も胸がさわいである。

付け文の内容は……。

……以前から千代どののことを慕わしく想うていました。人に知れぬよう、いろいろとはなしたいこともあり、貴女からうかがいたいこともあります。

そこで、明後日の七ツ半（午後五時）ごろに、新川太神宮・境内までぜひぜひ、おこしねがいたい。

と、およそこうしたものである。

この付け文を、千代が、もし父の弥兵衛に見せていたら、事件は起らなかったろう。なぜなら、弥兵衛が見れば、付け文の筆跡が辻又五郎のものでないことを、一目で見ぬいたにちがいないからだ。

二

当日が来た。

千代は、昼すぎから、亡母の親類すじにあたる大伝馬町二丁目の紙問屋〔万屋加右衛門〕方へ、

「一夜泊ってまいります」

と、父へいいおき、藩邸内の長屋を出た。

そして、付け文が指示した七ツ半すこし前に、千代は女頭巾に顔をつつみ、新川太神宮の境内へ入って行った。

新川太神宮は、牧野屋敷からさほど遠くもない新川河岸の近くにある。寛永年間に、伊勢大神宮を勧請し、遙拝所としたものだ。境内はさしてひろくないが杉木立にかこまれた拝殿も古めかしく、酒問屋がたちならぶ新川河岸のにぎわいがうそのようにおもわれるほど、境内はしずまりかえていた。

まして、夕暮れであった。

境内の杉木立の中へ入り、千代がとどろく胸を押え、どれほどの時間を立ちつくしていたろうか……。

突如……。

濃い夕闇につつまれた木立のどこやらで、はじけるような男の笑い声がきこえた。

千代は、はっとした。

「は、はは……来た、来た」

「化けもの女が、ようも、お、く、め、ん、も、な、く……」

「ふ、ふふ……」

「これはよい、これはよい」

すくなくとも、三人はいる。

「ふふん。付け文がもらえる面か」

苛酷きわまるそのことばを最後にして、男たちの笑い声が木立の彼方へ消え去った。

千代の全身が、瘡のようにふるえはじめた。

立ちかねて、そこへうずくまり、千代は両袖に面をおおった。

男たちの声の中に、千代は、江戸家老・田中半太夫の長男・主馬しゅまの声を、たしかにきいた。

この夜。

千代は、藩邸へ帰らず、父へいいおいたとおりに、万屋加右衛門方へ泊っている。

翌日の昼近くなって、千代は藩邸へもどって来た。

父の弥兵衛は非番で、病床の弟と暮をうっていた。

辻又五郎は父と同じ組にいるのだから、父が休みのときは又五郎も休んでいることになる。

午後になって……。

千代は、かの付け文をかくし持ち、父には内密で、辻又五郎の長屋を訪問した。

「これは、鈴木殿の御息女……」

辻又五郎は、弥兵衛からの用事で千代があらわれた、と、おもったらしい。

しかし、女ひとりの訪問であるから、独身の自分の長屋へ上げることがはばかれた。

「何用でござろう？」

玄関口で、又五郎が問うや、

「内密の用事にごさいます」

と、千代がおもいせまった表情でいう。

「内密……？」

「はい」

「それは……」

「お人ばらいを、ねがいとうございます」

又五郎の両親は、すでに病没してい、去年の夏に、ひとりきりの妹が、これも病気で亡くなっていた。

そのとき、又五郎の長屋にいたのは、老僕の与平のみである。

「では……」

と、仕方もなく辻又五郎が、千代を奥の居間へ通し、

「その、内密の御用とは？」

「これを、ごらん下さりませ」

千代が、くだんの付け文を又五郎の前へ出して置いた。

「拝見して、よろしい……？」

「はい」

読んで、又五郎の顔色が変わった。

当然であろう。

たしかに、自分の名はしたためであるが、むろん、

(自分の筆跡ではない)のである。

又五郎は、付け文を手にしたまま、千代を見た。

千代は、だまっている。

又五郎を見返した眼を伏せた。

「おうたがいなれば、この文面と同じものを、この場において、私がしたためてごらんにいれましょうか……」と、又五郎がいった。

千代が、うなだれたまま、強くかぶりをふった。

そうしてもらうまでもないことが、

(又五郎さまを見れば……)

はっきりと、わかったからであらう。

「千代どの……」

「は……」

「おさしつかえなくば……私に、事情を、おきかせ下さるまいか」

千代は、こたえぬ。

「私にとっても、これは、まことに心外なことです」

と、又五郎にいわれたとき、われ知らず、千代がはらはらと落涙したものである。

辻又五郎が「心外だ」というのは、当然のことだ。

けれども、千代にしてみれば、はっきりとそういわれたとき、何故に、付け文をもって、ひそかに又五郎を訪

問したか……そのわれとわが胸底にひそむものを、いまこそおもひ知った、といつてよい。

昨日の新川太神宮境内において、江戸家老の息・田中主馬の嘲笑をきいたときから、千代は、又五郎が付け文を書いたのではないことを、直感していた。

それでいながら、今日になって、われにもなくふらふらと、付け文をもち、又五郎宅をおとずれたのは、

(もしや……?)

とねがい、祈る、女ごころがあったからではないだらうか。

田中主馬たちのいたずらも、そこには何か根拠があったのではあるまいか……。

辻又五郎が、自分に対しての何らかのおもひがあり、それを知っていればこそ、主馬たちは、あのようないたずらをおもいついたのではあるまいか……。

三日前に、付け文を又五郎からのものと信じきって読んだとき、おのが全身に燃えあがった情熱の烈しさが、これほどのものとは、千代もおもってはいなかった。

だが、いまこそわかった。

「私が書いたものではないが……私は、以前から千代どののことを想うていた」

又五郎から、その一言をこそ、自分はききたかったのではないか。

（ああ、なんという……）

あさましいことだ、と、千代はくちびるをかみしめた。

悲しみの涙ではない。

「化けもの」とまでいわれた女の自分が、そこまで、

（おもいあがっていたとは……）

それが、くやしいのである。

自分への怒りの涙であった。

「ごめん下さりませ」

涙をぬぐい、又五郎の手から付け文を受けとった千代が、

「まことに、ごぶれいきわまることをいたしてしまいました。又五郎さま。なにとぞ、千代をおゆるし下さいませよう」

「いや、それよりも事情をうけたまわりたい」

「申すまでもござりませぬ」

千代のおもてに、さびしげな笑いがうかんだ。

「なにごとくも無かったことにしておいて下さりませ」

「待たれい」

「ごめんを……」

身を返して玄関口へ去った千代の挙動の速さに、辻又五郎は、これをとどめるひまがなかった。

三

千代が自殺をとげたのは、この夜半であったという。

あれから、千代は藩邸を出て、親類の万屋加右衛門方へ行き、その離れの一室へ泊り、ここで自決をした。

父が奉公をしている藩邸内を血で汚しては、父の身にがめがあるろう、と考えたからである。

自殺は作法通りのみごとなものであった。

ま新しい下着に着替え、両ひざを縛し、懐剣をもって心臓を一突きに突き刺し、絶命していた。

朝になって、これに気づいた万屋方から、すぐさま知らせがとどいた。

鈴木弥兵衛が、とるものもとりのあえず万屋へ駆け向って間もなく、

「鈴木殿の息女が、自殺をしたそうな」

と、うわさが藩邸内にひろまった。

辻又五郎は、同じ勘定方の後輩として、

「何かと、手も要りましょうかと存じますゆえ……」

と、ねがい出て重役の許可を得、万屋へ駆けつけた。

千代の遺体がある万屋の離れで、鈴木弥兵衛は老眼を泣き腫らしていた。

「弥兵衛殿……」

「又五郎殿か……」